第４課　救いの計画と終末時代

【暗唱聖句】

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」ヨハネ第一4:10

「ここに愛があります」と聖書が教えるのは、父なる神様が私たちの罪を償ういけにえとして御子イエス・キリストをお遣わし下さったことです。自分は我が子を他の者のために、しかも自分に逆らうもののために、与えることができるだろうかと想像してみれば、それがいかに大きな愛であるかがわかることでしょう。天国には、もはや夫婦や親子という関係はなくなり、みなが天使のようになると聖書は教えています。だとするならば、この地上において親子という関係を神様が計画されたのは、単に増え広がるためだけでなく、神様の愛を知るためでもあったのかもしれません。やがて天国に入るとき、人間だけが、自分たちに示された十字架の神の愛を知っています。天使たちさえ知らない十字架の愛が、幸せと喜びの源としていつまでも永遠に輝き続けるのです。

【今週のテーマ】

【日曜日・父なる神の愛】

「フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示しください。そうすれば満足できます」と言うと、イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示しください』と言うのか」ヨハネ14:8、9

フィリポは父なる神様をもっと知りたいと願いました。「そうすれば満足できます」と言っていることから、彼が神様を心から求めている誠実な姿が伝わってきます。これに対してキリストが言われた言葉が、すべてを一瞬のうちに解決してしまいます。それは「わたしを見た者は、父を見たのだ」という言葉でした。イエス・キリストが地上に来られた理由の一つに、父なる神様の愛と正義を示すことがありました。旧約聖書の神様は怖い神様で、新約聖書の神様は優しい神様という誤解されがちなのは、聖書の書き方によるところが大きいのですが、これはイエス・キリストによって神様の愛を知った新約時代の弟子たちと、完全にはわからなかった旧約時代の預言者たちの違いと言えるのかもしれません。

イエス・キリストは憐みに富み、優しいお方であるのと同様に、父なる神様もそうであることをわたしたちは知ることができます。また旧約聖書で描かれている神様のお姿も注意深く読み進めていけば優しい愛の神様であることが実はわかります。

「主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち」出エジプト34:6

またキリストは続いてこういわれました。

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである」（ヨハネ14:10）

この言葉を理解するのに私たちは少なからず時間を要することでしょう。2つの命ある存在が一体となるというものが、この世界には存在しないからです。それは寄生するのとも違いますし、体を乗っ取るわけでもありません。2つの者が1つとなって矛盾なく調和し、自然な形で存在し得る、これが神の世界なのです。そして、さらに驚くべきことは、同じことがわたしたちとイエス・キリストの間で起こることです。

「はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである」ヨハネ14:12

イエス・キリストは「わたしを信じる者はわたしが行う業を行う」であろうと、言われました。これはイエス・キリストとわたしたちが一体となることを意味しています。そればかりか「もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである」と言われました。これまで肉体的な制約の中におられたイエス・キリストが自由となるからでしょう。しかし、もっと大きな業とはいかなるものであれば、本当に驚くべき約束です。

【月曜日・キリストの愛】

罪とは神様から離れる、その愛の麗しい平和の関係が破壊されたことを意味しています。再び神様と人間との間に平和が築かれるためには、想像を絶する犠牲が必要となりました。それがキリストの十字架でした。十字架が神の愛と正義を満たし、人間が神様と和解するためのただ一つの方法でした。神様は正義を曖昧にすることはできません。しかし同時に神様は愛の方であり、それは赦す愛でした。この2つを同時に満足させるためには、十字架によって愛を正義の両方を満たすしかなかったのです。

ヨハネ1:1を見ると「初めに言（イエス・キリスト）があった。言は神と共にあった。言は神であった」とあり、イエス・キリストは永遠なる神であることがわかります。その「言は肉となって、わたしたちの間に宿られ」（ヨハネ1:14）ました。神の愛と正義を満たすために、わたしたちと同じ弱い肉体を取られたのです。そして、人として律法を全うし、わたしたちの身代わりとなられたのでした。これらのことは父なる神様に完全に頼ることによって可能となったのでした。

イエス・キリストは完全に神であり、また人間でした。「万物を御自分の力ある言葉によって支えておられ」（ヘブル1:3）る方は同時に「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子」でもありました。神であられる方が最も弱い人間の赤ちゃんとしてお生まれ下さり、わたしたちに愛を示してくださったことは驚くべきことです。ここに神の愛を見出すことは難しいことではありません。

【火曜日・聖霊の愛】

聖霊を誤解している人が少なくありません。聖霊を単なる神の愛情だとか、力だと考える人もいるようです。しかし、聖霊の神様は人格を有する三位一体の神様の一人です。聖書に描かれている聖霊の描写を見るだけでも、様々な働きをしておられることがわかります。一例を挙げると、聖霊はキリストに栄光を与え、人々の罪を明らかにします。聖霊は弁護者であり、助け主、慰め主でもあります。また教え、とりなし、真理へと導きます。聖霊の働きが無ければ、わたしたちはイエス・キリストのことがわからなかったことでしょう。つまり、聖霊はわたしたちにとってなくてはならない三位一体の神様なのです。また私たちが聖霊を無視するとき、悲しまれることあると聖書は教えています。

聖霊が単なる力ではなく神様であることは、様々な点から明らかなのですが、その一つに創造の業があります。キリストが受肉されるとき、聖霊によって宿ったと書かれてあります。

【水曜日：救いの確信】

自分の救いに確信が持てない場合、どうしたら良いのでしょうか。終末時代に備えるために救いの確信を持たなければなりません。

「彼がわたしを呼び求めるとき、彼に答え苦難の襲うとき、彼と共にいて助け彼に名誉を与えよう。生涯、彼を満ち足らせわたしの救いを彼に見せよう。」詩編91:15、16

「主の日、大いなる恐るべき日が来る前に太陽は闇に、月は血に変わる。しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。主が言われたようにシオンの山、エルサレムには逃れ場があり、主が呼ばれる残りの者はそこにいる」ヨエル3:4、5

「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」ローマ10:13

ここに神様を呼び求めるなら、救われる、あるいは救いを見せて下さると約束されています。神様を呼び求めることは、救いの扉を開く第一歩となります。その救いはこの世における救いであり、同時に永遠の御国への救いでもあります。

「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」ローマ10:10

救いの方法は、心で信じて、口で告白するだけです。それ以外のことは求められていません。

「御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです」第一ヨハネ5:12

「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」ヨハネ10:28

結局のところ、救いの確信は自分自身を見ても得ることができません。むしろ、罪深さのゆえに救いの確信を失うだけです。自分自身を見るのではなく、キリストを見つめるのです。そこには神様の愛があります。親が子を愛するように。その愛を疑わず信じることです。

【木曜日：永遠の福音】

福音を「永遠の福音」（黙示録14:6）と呼んでいます。神様が永遠なる方であるから福音も永遠ということです。わたしたちが伝えなければならないのは、この永遠の福音です。人々はこの福音を聞く必要があるのです。

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」エフェソ1:4，5

福音とはイエス・キリストによる救いです。それは私たちが汚れのない聖なるもの、神の子とされることであり、天地創造の前からそれは始まっていたのです。永遠という概念は、限られた時間の中に生きているわたしたちには神秘的なものです。永遠の昔から私たちをイエス・キリストによって神の子にしようと選んでくださっていた、この驚くべき神様のご計画を素直に受け止めるとき、福音と喜びもより深く、確かなものになることでしょう。